

小川禎一郎先生を偲ぶ

1936年3月大阪府豊中市に生まれる。1959年3月大阪大学理学部化学科卒業。1961年3月大阪大学大学院理学研究科無機及物理化学専攻修士課程修了。1961年4月大阪大学理学部化学科助手。1966年9月大阪大学理学博士。1967年9月カリフォルニア大学バークレイ校博士研究員。1970年4月九州大学工学部工業分析化学講座助教授。1978年5月九州大学工学研究科分子工学専攻教授。1979年4月九州大学総合理工学研究科分子工学専攻教授。1985年4月日本化学会学術賞。1992年4月九州大学評議委員。1992年9月日本分析化学会学会賞。1997年第4回アジア分析化学会議組織委員長・実行委員長。1998年4月九州大学総合理工学研究科物質理工学専攻教授。1999年2月島津賞。1999年3月九州大学を停年退官。1999年4月九州大学名誉教授。2006年4月小川弁理士事務所所長。2016年弁理士業務引退。



2022年3月15日に本会名誉会員小川禎一郎先生が86才でご逝去されました。先生は今年の年賀状において、ご自身の余命ががん検診から今年の春頃までであり、昨年末には自宅療養となられたことを記しておられ、皆様のご健康とご多幸をお祈りしますと結んでおられました。ここに謹んで哀悼の意をささげると共に、先生のご業績を紹介しつつ生前のご様子を偲ばせていただきます。

小川禎一郎先生は学位を取得後、1967年にアメリカ合衆国カリフォルニア大学バークレイ校においてピメンテル先生の下で博士研究員として研究に従事されました。そこで高速走査赤外分光法に関して多くの研究成果を挙げられました。その後、九州大学工学部工業分析化学教室に助教授として着任され、電子衝撃分光法の研究を始められました。電子を用いて分子を励起し、その発光スペクトルを高分解能測定することにより、分子の高励起状態を経由する解離の素過程を解析するものです。水素のバルマー線発光のドップラー線形を精密に測定し、励起フラグメント種の並進運動エネルギー分布から分子ダイナミクスの素過程を解析した成果は、国際的にも高く評価されました。

1978年5月には九州大学大学院工学研究科分子工学専攻分子計測学講座の教授に就任され、1979年4月に九州大学大学院総合理工学研究科の設立にともない同研究科の教授へ配置替えとなりました。先生のご業績は多岐に亘りますが、レーザー蛍光法、レーザー多光子イオン化法、レーザー高調波発生法などを発展させ、単一分子の検出にも成功されておられます。世界に先駆けてレーザー多光子イオン化法を大気中の液体表面に適用し、水や水溶液の表面状態の特性を解析されたことは、現在でも高く評価されています。1999年にご退官されるまでの29年間の研究成果は260余編の論文として発表され、1985年4月には「電子衝撃発光スペクトルによる分子の励起・解離過程の研究」で日本化学会学術賞（物理化学部門）、1992年9月には「レーザー多光子イオン化・蛍光法による高感度分析」で日本分析化学会学会賞、1999年には「レーザーを活用した新しい高

機能・高感度分析法の開発と応用」で島津賞を授与されておられます。

一方、九州大学内においては1992年に評議委員を務められるなど多くの委員会に参画され、大学の発展に貢献されました。学術界においても本会を始め日本化学会、日本分光学会、日本放射線化学会の理事を歴任されています。1997年には福岡で開催された第4回アジア分析化学会議（ASIANALYSIS）の組織委員長・実行委員長を務められたことをご記憶の方も多いと思います。このように先生は学術の振興に寄与されると共に、本会の運営にもご尽力され、そのご功績は誠に顕著なものがあります。

現役を退いてからは弁理士の資格を取得され、2006年4月小川弁理士事務所を設立されました。2016年に80歳を期に弁理士業務を引退されるまで、ベンチャー企業の支援に尽力されました。最新の特許技術に精通され、本会の年会でも技術動向についてのご講演をお聴きになられた方も多いかと思います。

私が先生の薫陶を受けたのは学部4年生の卒業研究からでした。「新進気鋭」と言う言葉がぴったりの先生でした。当時、右も左もわからない私は研究室の先輩から「今度、先生の研究成果が英文で出た」と伺い、「英文で出す論文というのがあるようだ。とにかく凄いらしい」と誇らしく感じたものでした。電子衝撃発光スペクトルの実験装置はすべて先生の自作でした。先生の薫陶を受けた方は、その後も研究に必要な装置は自分で作るものだと考えていると思います。その後、私はレーザーの研究に携わることになりましたが、レーザーや計測装置はすべて自作することになりました。先生のお言葉で心に残っているのは、「これをしてはどうかと目上の人から示唆された場合は、まずやってみることが大切だ」ということでした。このお言葉は私の研究生生活の座右の銘となりました。

先生には学部学生時代から公私に亘り長年ご指導をいただき、誠にありがとうございました。深く感謝いたしますと共に、先生のご冥福を心よりお祈りいたします。

〔九州大学名誉教授 今坂藤太郎〕